

〈止まった刻 検証・大川小事故〉第4部 緊迫（4）「来るぞ」 児童駆け足に

東日本大震災による津波で、宮城県石巻市大川小は児童74人と教職員10人が犠牲となった。学校から約3.7キロ離れた沿岸部を襲った津波の目撃情報は、校庭で待機する教職員らに伝わり、情勢は一挙に緊迫する。第4部は当時の児童や住民らの証言を基に、3月11日午後3時25分ごろから津波襲来までの状況を再現、検証する。（大川小事故取材班）



◎15:25～津波襲来

「三角地帯へ逃げるから、走らず、列を作っていきますよ」

3月11日午後3時30分すぎ、石巻市大川小の男性教頭＝当時（52）＝らが、校庭に避難していた児童たちに呼び掛けた。

「まだ危ない状況ではないと思っていた。移動すんだな、みたいな」。当時5年の只野哲也さん（18）＝高校3年＝は、まだ切迫した雰囲気は感じなかった。

6年担任の男性教諭＝当時（37）＝らを先頭に、児童たちは釜谷交流会館の方向に歩き始めた。当時、学校には教職員11人と児童約80人がいた。

釜谷に住んでいた当時中学1年の木村優斗さん（20）＝大学2年＝は、父親と一緒に当時5年の弟を迎えに来た。地震発生後、北上川の底が見えるくらい水が引いているのを目撃していた。

父親は大川小前の県道に車を止め、木村さんが校庭に向かった。友達と話しながら歩く弟を見つけ、連れて行こうとすると、6年の担任に「（名簿に）チェック入れるから待って」と引き留められた。

「そんなのしてる暇ねーがら」。木村さんは無視して弟と走って車に戻った。「津波が来るとは意識してなかったが、本能的な動きだった」と振り返る。

教職員と児童たちは自転車小屋脇の通用口から市道に出た。大人1人程度の幅しかない。市道を挟み、隣接する釜谷交流会館の駐車場に向かった。

前方にいた只野さんは「えっ？」と思った。「三角地帯に行くって言うのに、こっちなら山の方が近いんじゃないかな」。疑問が頭の隅をかすめたが、教員の後を追った。

駐車場の出入り口に差し掛かった時、教頭が県道側から市道を走ってきた。「津波が来るから早く避難して」。大きな声だった。

教頭の声をきっかけに児童たちは小走りになった。只野さんも「急がないとやばい」と感じ、駆け足で会館前を横切った。

避難場所を探すため、校舎に入った男性教務主任（56）はこの頃、校庭に戻り、列を追ったとされる。保護者宛てのファクスで「校庭に戻ると、既に子どもたちは移動を始めていた」と記している。

長面（ながつら）に住んでいた永沼輝昭さん（77）は午後3時30分ごろ、孫2人を迎えに行った妻を会館駐車場で待っていた。友人から「波に追っかけられてきた」と聞き、校庭にいる妻に「早くしろよ」と呼び掛けた。

間もなく児童の列に交じって妻が戻ってきた。「山さ逃げっと」。声を掛けたが、妻は「みんなとあっちに行くから」と告げ、永沼さんの目の前を通り過ぎた。

列の最後尾から3～5メートル離れ、地元の民生委員の女性が児童に声を掛けながら付いて行った。児童の列は山裾の裏道に入り、永沼さんの視界から消えた。

釜谷の元住民高橋和夫さん（70）は自宅近くで、北上川の堤防を越えてあふれ出す水を見た。車で裏山に向かうと、会館前を通過する児童たちの後ろ姿が見えた。

「なんで、この時間に何してんだべな。どこさ行くんだべ」。不審に思いつつ、山裾に車を止めた直後、ものすごい音がした。

「バリバリバリ」

「ダダダダーツ」

「山さ上がれえー！」

高橋さんは大声で叫びながら夢中で山に登った。